

## 五月作品



☆今月の四人☆

総天然色

杜 沢 光 一 郎 埜 玉

夢はモノクロと思ひるしわれ夢精せし夜よりカラーもしばしばにみる  
カラー映画を総天然色などと呼んでゐた戦後日本なつかし「石の花」なつかし  
オリンピック近づききたる悲喜(こも)もをはらみあるべし何かおそろし  
戦前か戦後かほやけつつある今を東京オリンピック近づききたる  
われの愛の度合ひをわが猫試しゐしか消えて六日目に平然とあらはる

花の香、人の香

津 金 規 雄 神 奈 川

夕暮の人影すくなき園ゆけば尋めくるはそよ臘梅の香かき  
花の香はあはれ人の香過ぎし日のこころ騒ぎのよみがへりくる

## 月集スバル

臘梅のふくらむ蕾こらへゐる黄なる重みを今こそ放て  
日の暮のカツ井セツトと瓶ビール絶滅危惧種のそば屋にひとり  
早春は黄の花多し黄の花に寄せし想ひをたどりて睡る

添ひ寝

小 山 富 紀 子 京 都

春の雪舞ひはじめたる街角でおしあはせにと君と別れき  
ひつたりと春が添ひ寝をする床にあと十分と快樂けらくたのしむ  
しのぶらは直立しをり冷たしと思へどこれは春の雨らし  
目でものを言ふ術すべ覚えむ今日もまたマスクをつけて出でゆく朝ぞ  
昨夜踏みて入りし塩の散りほひて君亡き朝は二日目となる

微糖

田 中 愛 子 埜 玉

自転車のうへに黄色のかさ二本ひろげられをり雪晴れの朝  
「新型」も「コロナ」「陽性」も明るくてウイルスなればたちまちに闇  
高地にてトレレーニングをすることしマスクして駅の階段のぼる  
まちがへて(微糖)買ひたるコーヒーの缶にてしばし両手あたたむ  
謎解きに集中したし日本語に切り替へる「名探偵ポワロ」

☆

☆



水島晴子 兵庫

義歯しろき口元を見せ声かけ来落葉の道をけふも掃く人  
半世紀の契約果てて壁古ぶ市宮住宅群とりこはさると  
澄みやらぬさま物憂げにほそほと水は河床の石の間くだる  
葛城山も二上山も見えず冬雲は涯の景色をなべて覆ひつ  
岩根分け頂き指すにさも似たり独歩のきみがつよき歌詠む

武田弘之 神奈川

ヒコちゃんに叱られたくて開きたる「コスモス」今月号は休載  
「ぶけんな」と言はれさうでもつい癖で駄洒落を飛ばす歌会席上  
師の詠ます歌の体言止めかなし「ただよふ不安」また「冬の塩」  
辞書繰りて知れり「名詞」と「体言」の意味が微妙に違ふことなど  
百歳へ向かふ途上の不手際と思ひて今日の自分を恕す

高野公彦 千葉

若き日は遁世のごとくながながと朝寝したりき今も時たま  
朝寝よりまだ覚めなくてほの暗きわが識閥は桃源に似る  
西施乳とは河豚のこと 爛酒で河豚食べつつ美女をこそ思へ  
父母の形見のわが歯丈夫にて七十八歳すべて親の歯  
人生に挫けし人も混じりゐてアバは唄ふよ人生楽しんで

仲宗角 三重

とほき日のつづきのごとく寒蘭の花ひらきたりわが死をまつのか  
山鳩がけふも時間に来て鳴けりお前とおれの時間の共用  
はらはらと白き花散る木下にて甘夏柑の谷地はかげり来  
学徒兵吉野昌夫と新宿でかたりあかしきはやけふは亡し  
半熟の水蜜桃がうまさことわれも齧つて子供にをしへぬ

奥村晃 作\* 東京

柎二らが戦いし敵は中共の朱徳指揮下の八路军なりき  
八路军に明確な意志ありしかど我が軍に大義なかりしいくさ  
包囲され隊全員が殺されしいくさもあまた「山西省で  
剿共で對抗せざるを得なかりし中共軍とのいくさなりけり  
わが軍の剿共作戦を敵側は三光作戦と名付けせりけり

森重 香代子 山口

紅白の霞をのべし梅の苑踏み入りしかど梅の香は無き  
寒き風こもらふ昼の梅の苑した草ははや緑はぐくむ  
目前なるしらうめ一花黄の蕊の織き放射は限りもあらず  
豁然とみ空に開く白梅に老いたる面を近付けむとす  
冷えきりて陽にしづもれる夫の碑に別れを告げて帰り来たれり

日影康子 富山

移植臓器の運搬ヘリが墜落し全員死せりああかか理不尽  
早逝の母と長寿の父なりきふたりながらに倅せとほく  
自分なんか優勝していいのでせうか幕尻力士徳勝龍の涙  
汝にまだ為すことありと生かされて老老介護四年目に入る  
初めての訪問往診の医師・看護師はがらに笑まへば心強しも



狩野 一 男 東京

二月四日花山沢の山林で午後三時前事故ありしとぞ  
「伐採木の下敷きになり男性死亡」その「男性」は我が従兄なり  
木を恨むわけではないが、我が従兄倒れてきたる木でいのち死す  
宮林署定年退職してからも山にかかはる仕事してゐし  
我むかし二月の死者になるところ助けられ今、君の死嘆く

宮里 信輝 神奈川

古屋 祥子 群馬

畦の柔いまも残れば蚕飼ひの日、まゆの景氣に湧きし日おもふ  
終活が済めば天寿を待つのみかいないなほも怠らざれよ  
点字などひとりこつこつと習ふとぞ途中失明者きみの明け暮れ  
カローリ制限されて食べねど（美味ささ）のさう、は大切記憶保てよ  
小屋を捨て此処で暮らすの？ のんびりと仔猫は雑草（雑草）に沈みて眠る

影山 一 男 千葉

吉田茂岸信介の孫たちの政權つづき日本あやふし  
晩年の上田三四二の女人恋ひ死の入り口にエロスたゆたふ  
葉にて眠れば入りくるエロスあり病める身体の一瞬熱し  
肅々と死を受け容れて勁かりき日賀志明子さん想ふ冬の日  
わが言葉信じて生きむきさらぎの光をふふむ辛夷の蕾

桑原 正紀 東京

兄逝きてふるさとすこし遠くなる今年の春よまんざく咲けり  
一周忌すぎてさびしむ亡き兄をおもふころのあはくされるを  
周平忌に三日ずれたる兄の忌も（寒梅忌）とてひそかに名付く  
わが裡で周平と兄かさなりていよよ似てきぬ寂光の笑み  
亡きひとをおもへばみんな笑むゆゑに浄土思想をふともうべなふ

岡崎 康行 新潟

真正面、右手にそしてバックミラーに「雪富士」三昧 東名をゆく  
ひた走るわが道遠し「新東名」「新名神」過ぎ「中国道」へ  
帰るたび次姉にもすすむ認知症どうすればいいなあ加古川よ  
月いち度一週間は五〇〇キロかなたの長距離姉の介護  
「戦争を放棄」して約七〇年「老健」「特養」満員、空き待ち

小島 ゆかり 東京

挟られし冬土の中に見えてゐる竹の子はすでに根に節を持つ  
けやきの葉水平飛行を交へつつ地にし降りたりあととは動かぬ  
道の辺に機関兵長の墓立てりふたつとも西の海のかた向く  
竹林に揺らぎとどめて冬を立つ生きてゐる竹の幹の冷たさ  
除雪幅二・九四と書かれたる除雪車は空き地にうづくまりをり  
細道にバスは入りつつ見るつもりなく見てしまふよその家々  
用心の過ぎる家あり不用心に過ぎる家ありバスでゆく町  
大根のはな咲く畑につづく庭みづいろのサーフボード干しあり  
浄水場タンクの脇でメモをとる青年の眉上下にうごく  
いくつものバス停過ぎてひとつのみ記憶せり鶏鳴幼稚園前

木 畑 紀 子 京 都

抽斗の奥の三十年まへの手紙とりだした涙ぐむ

「悲しみの動機」貴重とわが著書に手紙たまひき原稿用紙七枚  
座長寛美のみぎうでなりし劇団主事山口進氏影のひとりとなりき  
歩き歩きその果て電話がつながらず丑三つに覚め故人ときぎづ  
めざむればホテル一室ああベッド机の配置が自室とおなじ

島 田 暉 神奈川

天に澄む月の光のこころ欲し老い人ひとり選歌をしつつ

朝の日が枯れし薄をくすぐるや穂先がすこし笑ひ出したり  
喉のおくに咳の赤鬼ゑすわりて鬼のこころを宥める一日

さ迷ひし心の闇に降りしきる銀杏並木の金色の雨

満天の冬の星座はつぶやけりギリシア神話の神々の声

大 松 達 知 \* 東 京

老哀と筆庄よわく書かれあり一画たして読めりその歌

じつとりと沈黙ばかり隙間ばかり言つちやいけないことは言わない

許すとは心で許すものなりや心が許すものなりや、許

要らないものなくればそれは要らないと、なぞなぞありて七歳は問う  
(黒霧島がすこし足りなく(白霧島)をすこし足したりまだこちら側



田 宮 朋 子 新 潟

雪国に雪なき睦月枯れ色の田畑のうへに碧空ひかる

雪おほふはずの越後の寒の内守門岳すだだすら純白ならず  
戦火でも失火でもなし豪州の森を焼きしはいかなる業火  
豪州の焼けたる森で火傷せしコアラの姿まなかひ去らず  
雪あらぬ二月の庭にひかり降りいぬふぐり、ひめをどりこさう咲く

清 水 正 子 神奈川

日曜の横浜線は楽しげに指話する人もゐて混みあへり

指話やめて青年の背に文字かきぬ若く愛かなしき笑顔のひとは  
うらうらの春に生まれしゆゑならむ冬の入口でわれは咳込む  
ホクナリントープが呼吸らしくにせり湯上りの胸に今夜も貼りぬ

昨日今日さらに明日へとあゆむため眠れ眠れと聴くサブリミックス

小 嶋 一 郎 佐 賀

揺れながら八角形の網いに縋る蜘蛛に軒端を貸すきのふけふ

ひと冬に一度も雪の降らざれば悲喜交々に飲み会果てぬ

緑陰も日射しもなどと虫のいい願ひを込めて齧の枝剪る

歌詠みて何を得るかと二度も聞くこの若造に即答をせず

妻在らぬ昼に湯呑を欠きしこと露見せぬまま夕餉を終へぬ

後 藤 美 子 北海道

生わかめ中肋ちゅうりやくこりと噛みながら冬海原のとどろきを聞く

カリフラワー、ブロッコリー、ロマネスコそれぞれに姿違へど味はひの似る  
牛すぢを圧力鍋に煮つつおもふかなり悪食にんげんといふは

八朔に似たるすずしき甘さなりカリフォルニア産(メロウゴールド)  
スーパーのカードのポイント溜まることひそか愉しむ家妻われは



福士りか 青森

おぼろげな色とかたちの世に住める父を笑はず林家木久扇  
お豆腐は黒い器にお浸しは白い器に、父の手に

高らかに今日の料理を説明す父の脳裏にゑがかれるやう  
寒過ぎて降れる「津軽の意気地なし雪」降りつく雪が雪を溶かせり

藤野早苗 福岡

トーフ屋のらつぱのやうな声あげて落穂ついでむ白鳥の群れ  
髪に髪かさねて重き花首の 輪廻の中に咲けるその花  
春の夜の闇の粘力鉄幹をおほふ鱗の苔を見しより

くさびらと禽を煮てをりきさらぎの光手元に及ぶ厨に  
コンパスで描いた円の内がはに抜け駆けしなれといふ女子ルー  
フリクシオンボールの青色インクそは冥府の闇の色 知らんけど

風間博夫 千葉

「不」を皿に載せて盃、「次」載せて世にあらはれてきたる盗人  
水鳥が捕りし獲物を空中で奪ひとるとふ盗賊鷗

夜盜蛾の幼虫夜盗虫、夜に畑土を出て野菜の葉喰ふ  
味噌汁は薄味、われの血圧の高きを妻は今朝もうれひぬ  
ウィルスを使ひ捨てマスク防げるかでもねマツモトキヨシ売り切れ

橘 芳 園 新潟

あめあられあめゆきこゆきぼたんゆきわれはこの世のいかなるかたち  
人の苦を自が苦となさずなし得ぬは恩寵ならむふる雪見つむ  
寺を捨て母を捨てたるわが汚名そそがむとして雪降りつづく  
死んだふりしてゐることにたへきれずまづまんさくがこゑをあげたり  
夜のキッチンたてかけておくまな板がきのふと同じ音でころびぬ

水上比呂美 東京

神泉駅南口前の坂のぼりはた坂くだり方位うしなふ  
神泉の坂の途中にありにけり(富士氷室)といふ製氷店は  
さらぎの夜の氷屋に男らは水をざらざら袋に詰める

神泉の居酒屋(あてど)の白壁にバステル画十枚浮かびてゐたり  
神泉の居酒屋を出て坂道に師と見上げたる十三夜の月

鈴木竹志 愛知

ミコアイサらしきが泳ぐ川渡る東海道線大高を過ぎ  
鳥の名を覚えてたくともわが庭に来るはヒヨドリ、スズメのたぐひ  
山茶花を植ゑざる庭に訪れのなくてメジロは向かひの庭に

あたたかき冬にやむなく公園の梅は半月早く咲き出づ  
咲きたくて咲くといふより外気温高き日続けば梅は咲きぬる

原賀環子 東京

濃霧といふシャットダウンの夜にして探してたり霧のなかの月  
雪をとぶ鴉や屋根につと降りぬ羽の重みにつかれたるらし  
革ソファーに沈みこんでる積ん読の本の底から聖書の出で来

洗面所を出て放浪の二十分 夜の歯みがきは男のこころ  
ふだらくへ行く箱船の瀝青の蒼きふなばら俣びつつ寝ぬ

水上 美季 東京

卯かけごはん食べつつ思ひをり海豹を狩る北極熊を  
水上に呼吸孔あけ海豹を待つ北極熊の濡れた鼻先  
成功率2%の海豹狩りを母熊ときに子を連れ見せぬ  
白い毛の下は真黒の肌といふ北極熊の熱帯ぶる体  
遥かげに生まれてそして死んでゆく北極熊か ぬるき雨ふる

大野 英子 福岡

エリザベスカラーの外葉に覆はれてふくぶくし冬の珠実甘藍  
〈忘る〉といふ歌と出会ひて忘れぬし何かに気づく何であつたか  
銀色の絹糸垂るるはかなさに外灯のなかに降る冬の雨  
もう上がる夜明けとともに上がるはず雨はひそかに河面に吸はれ  
白ふちのきはだつひとみに見惚れます抹茶色なるうるはし繡<sup>めじろ</sup>眼児

松尾 祥子 東京

夜を照らすましろき月のまんまるの一升餅を背負ふ一歳  
をんな手はたくましきかな握り飯にぎる母姉娘わたくし  
嘘に嘘かさねることは「安倍る」なり森友、核、原発、コロナ：  
ウイルスは生物兵器といふ説の実験室の白きてぶくろ  
病院の十一階に空仰ぐ子の腎臓に針刺されるん



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八—一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一—二二—二〇

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六—三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一—一四—一六